

プロジェクト名： 東アジアにおける墳丘墓の比較研究

代表者：中村大介（教養学部・准教授）

1 はじめに

遼東半島では新石器時代、日本列島では弥生時代の途中(BC6世紀)から墳丘墓が出現し、当時の地表面より高いところに死者を埋葬するようになる。また、華中・華南でも土塚墓とよばれる墳丘墓が青銅器時代から出現し(BC.18-5世紀)、墓制の主体となる。これらは深い墓壙をもつ中原の封土墓とは対照的な墓制であり、中原周辺地域の文化的特異性を示している。そして、これまではそれぞれの地域で成立過程などが研究されてきた。本研究の目的は、各地の墓制の特徴を整理し、相互関係を知ることである。そのため、長江流域の土塚墓の踏査を行い、さらに浙江省のシンポジウムに参加して、この問題についての報告を行った。以下はその内容である。

2 日本列島の周溝墓と墳丘墓

「周溝墓」は、周溝、墳丘、木棺など全てが弥生時代になって出現する要素で構成されており、縄文時代に系譜が追えない。そのため、近畿地方生成説、九州地方起源説、朝鮮半島起源説、中国秦墓起源説、各地発生説など、起源について論争が続いている。しかし、多くの研究が外観的要素である周溝に着目してきたため、周溝墓の葬制における本質的な革新性についての議論が不十分であった。加えて、日本列島には周溝墓以外にも、「台状墓」や「区画墓」と呼ばれる類似した墓葬があり、これらとの区別も曖昧である。この問題については、以前に検討を行ったことがあるので(中村2007)、ここでは結果のみ以下のように整理しておきたい。

- ①出現期の埋葬施設数は、近畿地方は単数埋葬主体であり、九州地方は多数埋葬である。
- ②墳丘の有無については、近畿地方には必ず存在するが、九州地方にはない場合も多い。
- ③墳丘をつくり、当時の地表面よりも上に遺体を埋葬することから、近畿地方の周溝墓は「墳丘墓」に属し、九州地方の周溝を有する墓葬は、そうした意識が明確ではなく、区画内に埋葬するだけであるから、「区画墓」に属する。さらに埋葬施設の構築位置で対比すると近畿地方が「地上式墓」、九州地方が「地下式墓」となる。
- ④台状墓は埋葬施設を先に構築する可能性があり、周溝墓とは別系統の「地下式墓」である。

このうち、最も重要なことは近畿地方の周溝墓が墳丘墓であり、九州などでみられる類似の墓制とは別系統という点である。基本的に弥生文化は朝鮮半島から北部九州を経て、西日本各地に拡散するが、周溝墓はこの動きとは異なる。弥生時代の前段階である縄文時代においては、地上より高い場所に死者を埋葬する意識はなく、近畿地方で自然発生する文化的脈絡はない。この時期に墳丘墓と同じ地上式の墓制を採用しているのは、近隣では朝鮮半島だけである。

3 周溝墓出現期の朝鮮半島の墓制

朝鮮半島では、日本列島で墳丘墓が出現する時期には大きく系統の異なる二つ文化がみられる。ひとつは在地の松菊里系文化、もうひとつは遼東地域から南下してきた粘土帯土器文化である。前者の墓葬は地域によって墓制が異なるが、錦江流域や蔚山地域を除き、支石墓が多くつくられた。後者の墓葬は墓壙の深い木棺墓である。

支石墓と石棺墓を含めた朝鮮半島の墓制についてはかつて論じたように、埋葬施設の構築位置、すなわち地上式と地下式で極めて強い地域性を示す。本稿に関係する部分について結論だけを述べると以下になる。

- ①湖南地方の西海岸地域における地上式の卓越
- ②嶺南地方南部における地下式の発達
- ③湖西地方の扶餘周辺における石棺墓を中心とした地下式の卓越

ただし、嶺南地方南部でも馬山鎮東里遺跡のように、周溝と墳丘のある地上式の墓群が存在する。後にふれる周溝墓石棺墓の存在や、南江流域の大坪里遺跡群の墓域に混じる地上式の墓の存在を考慮すると、一定量、この地域にも地上式墓が組み込まれている。とはいえ、長期的な視点で見ると、原三国時代から三国時代と、青銅器時代の地上式と地下式の地域性は、完全ではないが、重なる場合が多い。特に、湖南地方西部では地上式が継続し、原三国時代には周溝墓が成立する。

湖南地方の支石墓の様相を詳細にみてみると、東南部で半地上式或いは墓壇が浅いものが多く、東南部以外地域である北部から西南部で地上式が多い。地上式の墓制が主体である地域としては、ここが距離的に西日本に近い地域であり、近畿地方の地上式墓すなわち墳丘墓の系譜がここに辿れる可能性がある。

一方、この時期には石剣や松菊里土器などが近畿地方までみられる。松菊里式土器は嶺南地方には少なく、湖西地方から湖南地方で多くみられる。おそらくは、新たな交流及び少数の渡来により、近畿地方で地上式という墓制の概念のみが受容されたのだろう。朝鮮半島でも石ではなく土で地上式にする周溝墓石棺墓が支石墓の導入期にみられるため、地表施設の構築材よりも地上式という意識が重要であったことがわかる。同時に地表施設構築材は素材の代替が可能であったようである。なお、北部九州では、この時期にはすでに、地下に死者を密封する葬制が広まっていた。墳丘墓とは対照的な死者の扱いであり、これが地上式墓の受容を阻害したのだろう。北部九州と近畿地方の葬制にみられるこうした差異は、以後も継続し、両地域の文化的差異へと展開する。

4 土塚墓との関係

土塚墓は近畿地方の周溝墓（墳丘墓）と同時期にも存在するが、この時期に、両地域に相互交流があったという証拠は全くない。また、土塚墓は西周時代から戦国時代にかけては、墓壇を掘らずに、遺体を安置し、その上に土をかぶせて墳丘を構築する。漢代から墳丘を構築した後に、深い墓壇を掘って埋葬するという形態に変わる。一応、当時の地表面よりも遺体は高い位置に埋葬される場合が多いが、深い墓壇という点において、中原地域などからの影響を受けており、この時期に大きく土塚墓が変質したことがわかる。日本列島の周溝墓は、墓壇は浅いが、埋葬施設の構築順序については漢代の土塚墓に近い。しかし、弥生時代前期後葉（紀元前5世紀）には出現しているため、漢代以前である。戦国時代の土塚墓とは構築方法が大きく異なることから、日本列島の墳丘墓と長江流域の土塚墓は、墓そのものをみても関係がないといえる。これが今回も新たな成果の一つである。

5 おわりに

現在、地上式墓は、中原地域の周辺である環黄海・東中国海に広く分布することが確認されている。長江流域の土塚墓、遼東半島南部の積石墓、遼東半島中部から朝鮮半島西部の地上式支石墓、日本列島の瀬戸内・近畿地方の墳丘墓がその代表である。また、ユーラシア草原地帯にも、地上式墓が一時期出現する。

草原地帯の地上式墓は初期スキタイに関係する可能性が高いとされている。しかし、環黄海・東中国海においては、土塚墓と積石墓には直接的な関係はなく、土塚墓と日本列島の墳丘墓にも直接的な関係はないので、民族的な同一性は認められない。

ただし、長江下流域、遼東半島、日本列島では漁撈を盛んに行っていたという共通性があり、〈三国志〉には呉と倭で「文身」習俗が類似するという記述がある。さらに、誤解ではあるが、「蓋国在鉅燕南倭北倭属燕」（山海経）や「倭人在帯方東南大海中…自謂太伯之後」（晋書四夷伝倭人）というように、これらの地域についての属族問題や交流関係に関する記事もある。環黄海・東中国海において中原地域とは根本的に異なる地上式の墓葬が広がっていたという事実も、こうした誤解を助長させたかもしれない。しかし、逆に考えると、これらの誤解は、生活環境や生業における共通性が、墓葬の選択に関係する可能性を示唆しているとも解釈することができる。この問題について、地域内、地域間の両方の視点から、今後検討を深めていく必要があるだろう。